

京都大学教育研究振興財団助成事業  
成果報告書

平成26年9月11日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団  
会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 理学研究科

職名・学年 博士課程3年

氏名 川 添 達 朗

助成の種類	平成26年度・若手研究者在外研究支援・国際研究集会発表助成		
研究集会名	第25回国際霊長類学会大会		
発表題目	Patterns of coalition formations among male Japanese macaques ( <i>Macaca fuscata</i> )		
開催場所	ベトナム社会主義共和国, ハノイ市, メリアホテル		
渡航期間	平成26年8月7日 ~ 平成26年8月27日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有( )		
会計報告	交付を受けた助成金額	150,000円	
	使用した助成金額	150,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	航空運賃(Fees, Taxes, Charges込)	108,170円
		学会大会参加登録料	23,000円
		宿泊料	43,276円
		交通費(日本国内)	2,810円
交通費(滞在先)		3,000円	
	*助成金額の超過分は私費で補填した。		
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) このたびは貴財団の研究助成に採用していただき誠にありがとうございました。貴財団助成は若手研究者と一般研究者を異なる助成枠で扱っており、助成金を獲得することが困難な若手研究者にとって海外での発表機会を得られる貴重な機会であると思います。ぜひ今後も若手研究者を積極的に支援していただくことを切にお願いいたします。交付手続きや入金も迅速かつ、問い合わせにも丁寧にご対応いただき感謝いたします。		

## 成果の概要／川添達朗

参加会議：第 25 回国際霊長類学会大会

会期：2014/8/11～2014/8/16

於：ベトナム社会主義国ハノイ市

発表日時：2014/8/12 19:00～21:00 (ポスター発表)

英題：Patterns of coalition formations among male Japanese macaques (*Macaca fuscata*)

和題：ニホンザルのオスにおける連合形成のパターン

私は今回、貴財団の「国際研究集会発表助成・若手」の助成により、ベトナム社会主義共和国ハノイ市で開催された第 25 回国際霊長類学会大会に参加、発表する機会をいただいた。本学会大会は 2 年に 1 度開催される、霊長類学において最も権威ある学術大会であり、著名な研究者だけでなく多くの若手研究者が世界中から一堂に会する場である。学会大会への参加を通して、多くの研究者と議論、情報交換を行ったので、その成果を報告いたします。

第 25 回国際霊長類学会大会は 2014 年 8 月 11 日から 16 日の日程で、ベトナムのハノイ市で開催された。今回の大会の特徴として、野生霊長類やその生息環境の保全についての発表が多かったことが挙げられる。ベトナムをはじめとする東南アジア諸国では霊長類学のような基礎研究が進んでいないのに加え、産業の拡大に伴う開発の推進のために、野生動物の生息環境の破壊が問題となってきた。今回の大会ではこのような背景を受けて、保全に関する発表が増えたのではないかと思われた。私は日本国内で霊長類の研究を行っており、保全に関してはあまり関心を向けていなかったが、本大会へ参加したことで、自分の興味がある研究分野だけでなく、野生動物やその生息環境の保全に留意する必要があることを感じた。

本大会の中で私は、「Patterns of coalition formations among male Japanese macaques (*Macaca fuscata*)」という演題でポスター発表を行った。霊長類には個体間の優劣関係が緩やかな種と厳格な種がいて、優劣関係が緩やかな種を対象とした研究からはオス同士が親和的關係に基づいて連合を形成することや、劣位オス同士の連合形成によって順位変動が起きることが明らかになってきている。しかし、私がこれまで研究の対象としてきたニホンザル (*Macaca fuscata*) のような厳格な優劣関係を持つ種ではオス間の連合形成と親和的關係の関連や、順位変動への影響は明らかにされていない。野生ニホンザルの観察を行い、優劣関係と連合形成のパターンを分析した。709 時間の観察中 205 回の敵対的交渉が観察され、オス間に直線的な優劣関係が認められた。オス同士の連合は all-down 型と bridging 型の連合がそれぞれ 12 回、6 回あり、all-up 型の連合は見られなかった。高順位のオスほど連合形成に多く関与し、グルーミングの頻度と連合形成に有意な相関は見られなかった。これらの結果は、オスが群れを頻繁に移籍するニホンザルでは長期的に安定したオス間の親和的關係が形成されにくく、親和的關係に基づく連合形成が起きにくいことを示唆する。また優位オス同士の連合形

成は、劣位オスとの優劣関係の維持に寄与し、順位変動の少ない安定したオス間の社会関係が形成されていることが示唆された。以上の内容の発表に対して、この分野における代表的な研究者であるドイツ、ゲッティンゲン大学の Julia Ostner 博士と Oliver Schülke 博士から研究内容に対するアドバイスをいただいただけでなく、互いの研究対象種について情報交換を行った。両博士とは前回の第 24 回国際霊長類学会大会の時にも議論を行っていたことや研究領域が同じであることもあり、今回の発表内容に関する簡単な質疑応答だけでなく、今後の研究の発展に関して専門的観点から様々な議論を行うことができた。両博士からのコメントをもとに研究のブラッシュアップが行えるとまた、ニホンザルと系統的に近縁なヒヒ属 (*Genus Papio*) の研究者も多く発表を聞きに訪れ、多くの議論と情報交換を行った。日本国内でヒヒ属を研究対象としている人は少なく、世界中から多くの研究者が集まる国際学会大会だからこそ行えた出会えた研究者も多く、彼らとの議論を通して非常に有意義な発表が行えたと感じている。

また私は、国際霊長類学会大会の直後に、貴財団の国際会議開催助成を受けてインドネシア共和国ボゴール市で開催された「第 4 回アジア霊長類国際会議 - アジアにおける霊長類の多様性と保全研究」にも参加し、インドネシアのボゴール農科大学の研究者や、ドイツのマックスプランク研究所の研究者と発表内容について議論を行い、情報交換を行った。この会議で知り合った研究者とは、帰国後もメールのやり取りを行い、今後継続して情報交換をしていく関係を築くことができた。

貴財団の助成を受けて海外で開催された二つの国際会議に参加したことで、これまでになかった新たな関心が生まれただけでなく、多くの研究者との交流を通じて、自分の研究を発信し、同時に研究をさらに進展させることができたと感じています。このような貴重な場に参加する機会を与えてくださった、京都大学教育研究振興財団に厚く御礼申し上げます。